

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育



特集

子どもと祭り

好評連載

津吹先生の
虫のつぶやき 3

10
2009

自己評価ガイドブック

～もっとすてきな保育のために～



監修／清水康之 著／大江恵子、渡部史朗、山本勝義、小出正治

これからの保育現場では「自己評価」が一つの大切なキーワード。「自分の保育、これでいいのかな?」「私の園の保育の質を高めたい」…。そんな保育士のみなさんにトライしてほしい、自己評価に役立つチャートが満載です。

目次

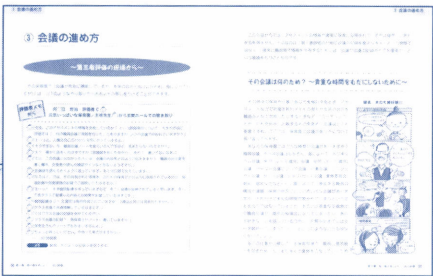
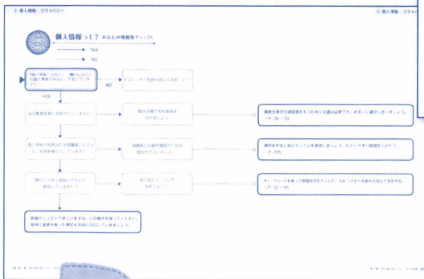
- 第1章 保育士ってすてきな仕事
- 第2章 取り組みましょう! 「自己評価」
～すべてはPDCA サイクルで～
保育理念／アセスメント／会議の進め方／整理・整頓／個人情報
情報／プライバシー／子ども的人権・性差への配慮／引継ぎ・
申し送り／利用者の要望・意向の把握と活用／マニュアル整
備／事故・ケガの防止／健康管理／地域とのかかわり／計画
の整合性と PDCA サイクル／園内研修
- 第3章 もっとすてきな保育士になり始めたあなたへ

23×18 cm 112 ページ 定価 1,575 円 (税込)

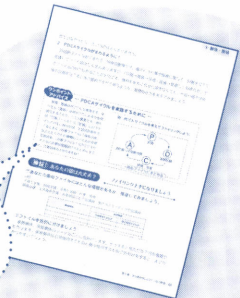
10913



自己評価のテーマを第三者評価項目の中から取り上げています。それぞれについて第三者評価事例紹介 → 解説 → 自己評価チャートやチェックボックスなどで構成。



PDCA サイクルを回すための
ワンポイントアドバイス付き



キダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第108巻 第10号



乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第108巻 第10号

巻頭言

デンバーでの比較文化体験

高濱裕子

4

もくじ

—特集— 子どもと祭り

地域のふれあいは、子どもを真ん中に

豊倉 厚 8

ドイツ キンダーガルテンでのお祭り

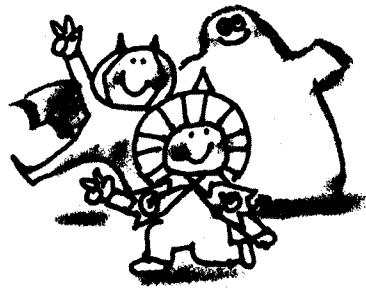
ベルガー有希子 14

地域でのお祭り体験

小泉かおる 20

祭りの服飾

和田早苗 26





保育の中の物語 (10)

「二人で」から「一緒に」へ

岸井慶子

32

園長のまなざし 第10回

母の思いと教師の心もち

田畑智枝

36

子ども文化の詩学 (5)

おもちゃの命

森下みさ子

38

ツツキ先生の虫のつぶやき 第3回

アカトンボの季節は秋?

津吹 卓

44

「幼児の教育」ネット公開に寄せて (10)

読み手の倫理観

吉村 香

48

保育の現場から

子ども園と共に

大川理香

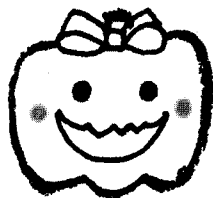
52

お茶の水女子大学「幼保大」連携保育研究の試み (34)

「保育者養成」をめぐるメール書簡 (2)

上垣内伸子 佐治由美子

58





卷頭言

デンバーでの比較文化体験

— 誰の視点から? どのような立場から? —

高濱 裕子

二〇〇九年の新年度早々、アメリカ合衆国コロラド州デンバーを訪問した。この訪問の目的は、四月二日から四日まで開催されたSRCD (Society for Research in Child Development) に出席し、私たちが進めている比較文化研究の成果の一端を発表することであった。

急激な社会・経済的変化の渦中にある日本の親子の実情を知ろうとすれば、日本だけを見ていたのではわからない。「日本人はどのようにして日本人になっていくのだろうか?」この素朴な疑問を追究するため、私たちは日本、韓国そして中国の親を対象として、親の社会化方略の検討を始めた(社会化とはその社会の成員としての一定の社会的行動様式を習得していく過程をさし、そのための手立てを方略という)。対象とした子どもの年齢の幅は広く、三歳から小学校三年生



までであった。さらに、子ども同士の関係をとらえるために、幼稚園・保育所の保育者や小学校の教師にも評定を依頼した。このようなペア・データを収集する手法を採った理由は、社会化のプロセスを、家庭だけでなく就学前施設や小学校をも射程に入れて連続的に検討していこうと考えたからである。

親の社会化方略に関する分析結果の概要を紹介してみよう。東アジア三か国を比較すると、統計的に有意な文化差は認められるものの、「関係の維持」方略と「自己への関心」方略は通文化的に使われていた。つまり、親たちは子どもとの関係を重視しつつ、親の権威によって方向づけていくしつけ方略をよくつかうのである。三か国間では日本と韓国の結果がよく似ており、中国の結果は若干異なっていた。とりわけ、中国の親は子どもとの衝突を回避する方略をつかう頻度が高かった。また日本の親の評定平均値は総じて低いが、中国の親のそれは高い傾向にあった。

今回の分析に基づいて三か国の社会化方略の特徴を整理すると、次のようになる。日本の親は「関係の維持」を、韓国の親は「自己への関心」と「他者への配慮」を、中国の親は「関係の維持」と「自己への関心」を重視していた。私たちの仮説は、中国の結果の一部を除けば、おおむね支持されたことになる。社会・経済的変動による価値観の変化、少子化やひとりっ子政策の影響、学歴や教育への関心の高まりなど、アジアをも巻き込んだグローバルな社会変動の波を痛感し



た次第である。以上は第一段階の結果であつて、さらに詳細な分析を進めるつもりである。

さて、第二の目的はデンバー美術館訪問であつた。同美術館のネイティブ・インディアン美術コレクションは、世界最大規模を誇り、合衆国とカナダすべての百五十部族から収集された約二万点が所蔵されている。プエブロ・インディアンのセラミック、ナヴァホ・インディアンの織物、ノースウエスト・インディアンのコースト彫刻（トーテムポールなど）、籠細工やビーズ細工、油絵などの多様な芸術的伝統に触れることができる。見学者の理解を助けるために、展示方法にも工夫が凝らされていた。ナヴァホの砂絵のように、子どもたちの興味や関心を喚起する参加型のコーナーも設けられていた。私が訪問したのは土曜日で、大勢の親子連れが楽しそうに取り組んでいた（第一土曜日は入場無料であつた！）。私は、インディアンの生活ぶりをイメージさせる日用品や衣服類、美術工芸品などを夢中になつて見た。ベスト類に施された繊細でいねいな刺繍、日本の伝統模様を彷彿とさせる壺の幾何学模様、丹念に織り込まれたラグ類が醸し出す物語性など。インディアンの妻たちの有能さに焦点を当てたコーナーもあつた。子どもをその中に寝かせ、背負つて運ぶ革製のクレイドルボード (cradle board) は中央部が革ひもで編まれ、周囲には繊細な彩色が施されている。この道具のおかげで、子どもはいつでも親と一緒に移動することができた。彼らは子どもたち



に惜しみない愛情を注いでいたのであろう。私はほとんど直観的に、「生活を大事にし、家族を慈しみ、部族を愛する人たち」なのだと感じた。

突然、身内に不思議な感覚が湧き起こり、次の瞬間、それは電流のように駆け抜けた。そうだ、西部劇だ！ これまで私が抱いてきたインディアンのイメージは西部劇によって創られたものだ。かつてはジョン・ウエインやステイブ・マックイーンが活躍し、俳優としてのクリント・イーストウッド（最近では監督業で有名）の出发点になった映画でもある。西部劇は白人側から描かれることが圧倒的に多く、それらの物語に登場するインディアンは、白人の生活へ侵入する者、安寧な世界を攻撃する者として描かれていた。頭に羽根飾りをつけ、自在に馬を操り、白人の金品や幼い子どもをも容赦なく奪い去っていく。美術館の所蔵品に触れて、私はインディアンの人々や彼らの生活について、自分が無知であったことを洞察したのである。

比較文化研究に参加する機会を得て、文化間の違いだけでなく、文化内の違いにも敏感になったことを自覚する。自分自身がある事象をいかなる立場からとらえているのか、どのような位置から自分の意見を述べているか、誰の視点から検討した調査結果なのか、そこに自分の価値観が反映されていないのかどうか。私たちはこれらを自覚的・意識的に省察する必要がある。デンバー滞在はそのことを改めて意識化させてくれた。（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科教授）

特集

子どもと祭り

地域のふれあいは、子どもを真ん中に

豊倉 厚

児童館ってどんなところ？

まず、「児童館」と、私が館長を務めている品川区立八潮児童センターがどのようなところか、簡単にご紹介します。

「児童館」は児童福祉施設の一つとして児童福祉法第四十条に規定され、地域児童の健全育成を主たる目的とする「児童厚生施設」として位置づけられています。「児童養護施設」や「保育所」などほかの児童福祉施設は「措置」や「契約」を基本として、

入所者もしくは利用者である児童が限定されていることとは大きく違い、〇～十八歳までの児童と、児童の保護者であればいつでも自由に利用できる地域に開かれた唯一の施設です。

わが国の合計特殊出生率が「1・57%」と急落し「少子化」が社会問題として大きくクローズアップされた一九八九年以降は、それまでの児童への直接処遇に重点を置いた基本事業にとどまらず、児童館が子育て支援の地域拠点として、主に在宅子育て家庭へのさまざまなニーズに応えていけるよう、施

設や事業の拡充を図ってきました。

品川区が初めて児童館を設置したのは昭和四十一年です。児童館は「児童センター」と呼称され、地域の乳幼児（またその親）や、中高校生に地域の身近な施設として親しまれてきました。八潮児童センターは、その二十五か所目の施設として昭和五十八年四月に品川区八潮五丁目に開設されました。延べ床面積1700㎡は都内で有数の広さを誇り、四年前の改装によって現在は練習スタジオ三か所、百人収容のライブホール、多目的に使用できるラウンジなどを整備して、ティーンズの音楽活動に重点を置きながら、一方では乳幼児親子へのきめ細かな支援に至るまで、文字通り〇〇十八歳までの幅広い事業展開をしています。

八潮子どもふれあいフェスタの開催

二〇〇八年十一月二十九日(土)、「地域のふれあい

は、子どもを真ん中

に」を合言葉に「第一回八潮子どもふれあいフェスタ」が開かれました。十一時のオープニングは、高校生バンドの元気がふれる演奏で幕を開けました。一階の多目的ラウンジでは、青少年対策地区委員の方々がサポートする形で、小学生グループの「おやつ縁日」が五店舗オーブン、その横ではピエロに扮した高齢者



▲高齢者グループによる手品



▲おやつ縁日



▲げんきっず写真展

グループが「手品」「動物バロン」や「占い」を担当しました。隣のライブホールでは、乳幼児母親グループの皆さんが、子どものオモチャや古着を

中心とした「リサイクルマーケット」を開店し、たくさん親子連れでにぎわいました。

またラウンジ奥のスペースでは、このイベントの目玉でもある「げんきっず写真コンテスト」を開催。

親（家族）だからこそ撮れるわが子の成長の「今」を写した一枚の写真を募集、応募六十六作品を展示し、審査委員はプロの写真家をはじめ、団地自治会

連合会長、学校長、幼稚園長、主任児童委員などの皆さんが快く引き受けてくださいました。

さらに、コンテスト終了後は商業施設の会長さんのご厚意

で、改めて「げんきっず写真展」として十日余り商業施設内に展示し、より多くの方々に見てもらう機会を設けることができました。

そして二階のスペースは、母親グループとボランティアサークルによる「小物や折り紙」のコーナー、そして具体的に子育てを応援する「乳幼児の健康ひろば」コーナーの運営には、地元の歯科医



▲歯医者さんによる歯科相談

師、保健師、民生児童委員、母親グループの皆さんが連携協力して運営にあたりました。

そして忘れてはならないのは、八潮児童センターのバンド活動で育った高校生スタッフの活躍です。彼らはオープニングの企画・運営はもちろん、乳幼児向け遊び歌、照明、音響、司会などの得意分野の技術を活かして素敵なステージを演出し、さらにはホール内にさまざまな大型遊具を設置した「幼児あそびコーナー」でも、幼児親子が楽しく安全に遊べるように、「遊びのお兄さん・お姉さん」に徹してくれました。

このようにイベント全体を運営する側も、このイベントに足を運んでくれたお客さんの側も、共に同じ地域に暮らす子ども、高校生、子育て中の親、子育てOBの親、高齢者であり、温かな雰囲気の中で世代を超えたふれあいと交流が実現できたと思っています。

子育て支援・子育て支援につながる

地域の「支え合い」のために

今日「少子化」「核家族化」など、子どもが育つうえで社会環境の大きな変化というハードルをどう越えていくのか、親はもちろんのこと、行政にも地域の一人ひとりの大人にも問われている時代です。特に八潮地域では大規模団地ならではの「一斉入居」のひずみが、今「少子化」と「高齢化」を一気に加速させています。

子育てを親だけが必死に頑張っても、高齢者の健康づくりを高齢者自身だけが頑張ってみても、あるいは、行政がさまざまなメニューを用意しても、これが地域全体の「支え合い」とならなければ、実を結ばないことは目に見えています。国も少子化社会対策大綱の具体的な実施計画として、二〇〇四年十二月に策定した「子ども・子育て応援プラン」の中

で「子育ての新たな支え合いと連帯」を重点施策の一つとして、各市区町村でも推進するよう提案しています。

「地域コミュニティの衰退」が進行している都市部において、こうした施策を実現していくのは容易ではありません。しかし、地域に暮らす住民同士が帰属意識をもつて自分たちの「街づくり」や「子ども」の未来」に関心を寄せてくれることができれば、決して難しくはないと思っています。

幸い、八潮児童センターは、昭和五十七年に誕生した約五千四百世帯、約一万三千人が暮らす大型団地の中心に開設されています。町会に代わる自治会をはじめ、各地域の団体や、高齢者のグループも、これまで二十数年にわたって「新しい街づくり」を経験してきた方々ばかりで、この街への思い入れは強く、地域の「支え合い」の中身を膨らませる条件は整っていました。

すでに子育てＯＢの母親グループや高齢者グループの方々が、母親向け「子育て応援講座」「親育ちワークショップ」「食育イベント」など、事業そのものや保育に協力してくれています。また、乳幼児親子運動会には必ず中学生、高校生が音響や用具の出し入れなどの裏方で活躍してくれています。このように「八潮子どもふれあいフェスタ」は、単に「一日限り」のイベントとしてではなく、〇〇十八歳までの子どもから高齢者も含め、さまざまな世代の人と人が、あるいは団体や関係機関が、日常的に無理なくつながり、子育てや子育てを応援していく一つの結節点になりつつあると考えています。

これからも、「子どもを真ん中」にした世代間の「ふれあい交流」を進め、地域の新たな「支え合い」のための土壌をしっかりと耕していきたいと思っています。

(品川区立八潮児童センター館長)

特(集) 子どもと祭り

【資料】第1回八潮子どもふれあいフェスタの概要

構成別	団体、グループ名	担当コーナー	
児童、生徒、青年	小学生グループ	《おやつ縁日》	
	高校生バンド	《ステージ》 幼児向け遊び歌 司会、音響、照明	
		《幼児あそびコーナー》	
	高校生・青年	《バルーンコーナー》	
高齢者グループ	やよい会	《占い》	
	あひるの会	《折り紙》	
	ゆりかもめの会	《手品・動物バルーン》	
幼児母親グループ	2・3歳児クラブ	《リサイクルマーケット》	
	自主クラブ		
地域母親グループ	Y学園読み聞かせの会	《読み聞かせ》	
	ボランティアサークル	《クラフト》	
	ひまわり	《乳幼児健康コーナー》	
歯科医院	歯科医師	身長体重計測	
保健センター	保健師	歯科相談	
地域構成団体	民生委員子育て支援部会	育児相談	
	青少年対策地区委員会	《おやつ縁日》小学生補助	
	健康づくり推進委員	《カラーコーナー》	
	連合自治会長(町会)	《げんきっす写真コンテスト》	
	主任児童委員	審査委員	
小中一貫校	Y学園校長	表彰	
商業施設	テナント会会長		
その他	プロ写真家		
幼稚園	W幼稚園園長		《幼稚園児作品展示》

特集

子どもと祭り

ドイツ

キンダーガルテンでのお祭り

ベルガー有希子



ドイツ語で、お祭りは、フェスト (Fest) と言います。

一年を通して、キンダーガルテン(幼稚園)では、さまざまなフェストを子どもたちと楽しみます。

春を迎える喜びいつばいのイースターのお祭り、夏には親子で楽しむサマーフェスト、秋には収穫祭、ハロウィーン、提灯祭り、冬にはクリスマスにちなんだフェストいろいろ、そして、二月には仮装を楽しむカーニバルがあります。

今回は、十月号ということもあり、収穫祭、提灯祭りを中心にお伝えしたいと思います。

収穫祭

ドイツ、バイエルン州の幼稚園は、九月が年度始め。クラスは、縦割りの二十五名が一般的です。異年齢児保育なので、その年その年によって、学校にあがる子どもの人数により、新入園児の数も変動があります。時には、半数の十二名が進学すること

も。そうすると、九月いっぱいには、たくさんの子どもを迎えることとなり、園の中は、少しざわついた状態です。

そんな中、新しいクラス編成をもって迎える最初のフェストは収穫祭です。ドイツの園でのお祭りは一日だけのフェストではなく、お祭り週間、というような感じなので、毎日収穫祭についてのテーマの保育が繰り返し行われます。

まず、子どもたちは家庭から野菜やくだものを持ってきます。りんご、梨、じゃがいも、プラムなど。その色や、においや感触をみんなで確かめて、名前を確かめて、そのくだものがでてくる歌や手遊びへとつながっていきます。

毎年歌うスタンダードな歌がいくつかあるのですが、子どもたちは一年間歌っていなかったにもかかわらず、すぐに思い出して口ずさみます。入園したばかりの三歳児も、うれしそうに自分の持ってきた

くだものを握りしめながら身体を揺らしています。そして、秋になってたくさんのかだものができてうれしいな、ありがたいな、という子どもの気持ちを膨らませていくようです。

ある日は、三歳児とくだもの貼り絵をしたり、ある日は、五歳児中心にりんごケーキを焼いたり、ある日は、粘土が好きな子どもたちを誘って、いろいろな野菜を作ってみたり。収穫祭がテーマの設定保育をしますが、みんな一緒にする保育は短時間で集団力を要するものや、工作などについては、少数で希望者を集めて活動することが多くなります。これは、クラスに二人以上の担任がいること、それから、クラスを越えた保育活動も実施されているというドイツ幼稚園の背景の中でこそ、実現できる保育の形だと思っています。

保育内容について、特に日本と違うと思うのは、子どもと一緒に料理が、保育の中に溶け込んでいる

ことです。収穫祭に関することだけでも、ケーキを作るほかに、かぼちゃスープやフルーツサラダ、コーンスープ、くだものの型抜きを使ったクッキー作りなど、たくさんアイデアがあります。

中でも、私が「さすがドイツ」と思ったのは、子どもたちと一緒にパン作り。「パンは、小麦からできているんだよ」という説明から始まって、こねるところから、イースト菌を入れてねかせておいて、一日がかりで焼き上げます。この活動は、全員が何かしらかわりをもちました。三歳児は、こねる時に参加して、年長児は、パンを形成する時に活躍しました。パンが焼ける時に、ずっと番をしている子もいます。パンの焼けるにおいは、園全体をなんんだか幸せな気分にします。できあがったパンを前にしてみんな大興奮。早く食べたくて、うずうずしています。

食事の前には、みんなで小麦をもたらししてくれる

大自然に想いを
はせます。日本
では「お百姓さ
ん、お父さん、
お母さんありが
とう」、と食べ
物を作ってくれ
る人に対する感
謝を言葉に表し

ますが、ここドイツでは偉大なる自然に対して、そして、大切な地球に感謝をします。私が勤めている園は公立なので、神という言葉は保育の中で出てくることはあまりありませんが、これが教会立の幼稚園の場合には、神様に感謝をささげる、ということになるでしょう。

幼児には、まだ、抽象的過ぎてわかりにくいのでは、と思っていました。それは、私の思い違いで



▲収穫祭（息子の幼稚園での写真。教会系のため、牧師が写っている）

した。幼児は幼児なりに、感覚として小さいころから、自然や神に対する畏敬の念を育てていくようです。日本人が、保育や日々の生活の中で、儒教的考え方を身につけると同じように、ドイツでは、キリスト教の教えが子どもの時からの生活に根ざしています。

こうして食べ物をもたらしてくれる大地の恵みに感謝しながら、自分たちで作ったパンをみんなと一緒にいただくのは、何にも増してのごちそうとなります。

提灯祭り

十月も下旬になると、だんだん気温が下がり、日が暮れるのが目に見えて早くなります。またサマータイムの終了もあって、フェスト当日十一月十一日は、五時すぎには暗くなるので、提灯祭りにはもってこいです。この提灯祭りは、中央ヨーロッパに昔

から伝わるお祭りで、実在する聖マーティンという聖職者の善行が言い伝えられています。

その言い伝えのあらすじは次のようなものです。
ある寒い日、マーティンが馬に乗っていると、貧しい人が道端で震えていました。その人が、助けを請うと、マーティンは、自分の着ているマントの半分を分け与えます。貧しい人が、マントのお礼を言おうとすると、マーティンは立ち去ってもういませんでした。

このお話から、みんなで分かち合うことや、貧しい人、困っている人がいたら、手を差し伸べることで、子どもたちにさりげなく伝えられます。

マーティンが主役となる行列に使う提灯を作ることは、園の例年の課題です。毎年、工夫を凝らした提灯ができるのでとても楽しみです。子どもたちと話し合いをもって、これが作りたい、という希望があればできるだけとり入れるようにしています。

去年、こんなことがありました。入園したばかりの三歳児のアレックスは、五歳児が中心となつて作っている難易度の高い提灯をどうしても作つてみたいと主張しました。この子の兄がこのクラスにいるので、兄と同じものがいい、という想いもあつたのだと思います。それは、風船を膨らませて、その上から細かく切つたセロハン紙を何重にも重ねていき、乾いてから風船を取り除くというものでした。それから、手や足を付けて動物の形に仕上げます。私は、「でも、この提灯は、時間がかかるし、上手に貼らないと手がべたべたになるから、ブラシの方にしようよ」と誘いました。

もう一つのグループは、落ち葉を拾つてきて、その落ち葉をトレーシングペーパー様の透けて見える紙の上に置き、絵の具のついたブラシを使って金網の上からブラッシングしています。すると、落ち葉の形だけを残してきれいな細やかな色がつきます。

これは簡単な作業なので、三歳児が作つても、できあがりきれいです。

でも、アレックスはどうしても、時間のかかる提灯の方がいいと言い張り、年長児たちと一緒に輪に入って、作り始めました。アレックスは、初めは夢中で紙を貼っていましたが、途中であきてしまつたのか、ペースが落ちてきます。そして、とうとう筆を放り投げてしまいました。

「アレックス、時間がかかるね。あした続きをしようか？」と言うと、目を輝かせて、そういう手があつたか、と思つたようでした。

それから、年長児が、一日で貼り終えた提灯を、アレックスは、四日かけて完成させたのです。

この時、アレックスはきつと自分で選んだことに對する責任について、アレックスなりに感じることでできたのではないかな、と思ひました。そして、もちろん「やった〜」という達成感も。私自身も、



▲提灯祭り

アレックスのやりたいという意欲の力強さに感心し、保育者として、彼の意思をねじ曲げることがなかったことに、ほっとしたのです。

さて、クライマックスの行列。暗くなったところに、提灯のろうそくに火をともし、お母さんやお父さんと一緒に子どもたちが集まってきました。馬に乗った聖マーティンが現れると、馬を先頭に幼稚園の周りの歩きやすい道を、二十分ほど歌を歌いなが

ら練り歩きます。

園に戻ってきた

ら、マーティンに

ついでに小さな劇

があります。

劇の中でマント

を剣でさっそうと

半分に分けて分け

与える騎士マー

ティンは、子どもたち、特に男の子にとっては憧れの的のようで、この時期、園では騎士ごっこがやはり、みんながマーティンになりました。

劇が終わると、保護者が用意してくれた温かいフルーツパンチとクッキーが子どもたちに振る舞われます。クッキーは、一人に一つずつ配られ、「マーティンさんのように、お父さんやお母さんにも分けてあげてくださいね」と呼びかけられます。子どもが小さい手で、クッキーを割って、大人たちに渡しているのを見るとなんだかあたたかい気持ちになります。

ドイツの秋のフェストを二つご紹介しましたが、どちらも、キングダーガルテンの保育の中で、行事というほどの仰々しさはなくとも、子どもたち、保育者、そして保護者にとっての大切なアクセントとなっていることは、間違いのないと思われます。

(ドイツ在住 ロバート・ペーカー通り幼稚園)

特集

子どもと祭り

地域でのお祭り体験

～娘たちとの夏を振り返って～

小泉かおる

夏休みの楽しみ

小学校が夏休みに入った後、

「駅に向こうは八月十七日と十八日で、K公園は二十二日と二十三日で……」

といった具合に地域のお祭りの開催日を確認し、仲

良しの友達を誘い、浴衣や帯や髪飾りをどうするか

あれこれ考えるのが、娘たちの夏の楽しみの一つで

した。

親の私かというと、それに付随する煩わしさを思

い、正直、憂うつさを感じないこともなかったの

ですが（浴衣の準備や洗濯はもちろんのこと、彼女た

ちが友達と約束した後、相手の親御さんとの送り迎

えの確認や当日の送り迎えなど、母がすることは多

岐に渡っていました）、今では、十八歳と十六歳と

なった娘たちが携帯電話で友達と約束を取り、自分

たちで浴衣を着るようになり、母を全く必要としな

くなると思議なもので、あの独特の高揚感と、そ

れを包み込むような真夏の夜の優しさが懐かしく思
い出されます。

巡りくる非日常

当時の母親の複雑な心境も知らず、彼女たちが
喜々として通っていたのは、マンションの駐車場の片
隅で開催される住民手づくりのお祭りや、地元の商
工会が近所の公園で主催する小規模のお祭りでした。

浴衣を着せてもらい、子ども会から配布された引
き換え券を差し出して、お菓子をもらい、ゲームに
興じ、あるいはキャラクターのついたビニール製の
財布に数百円の小銭を入れて、屋台のかき氷やラム
ネを買い、会場の片隅で友達と過ごすひとときがど
れほどに彼女たちの小さな心を躍らせたのか。七月
末の幼稚園での夏祭りを皮切りに、四か所で開催さ
れる地域のお祭りにほとんど連日参加していた時期
もありました。

彼女たちのグループを少し離れて見ていると、各
自買った飲み物やアイスを持って歩き回り、立って
おしゃべりしているだけで、笑みがこぼれ、頬が緩
みっ放しのようでした。

この時しか着る機会のない浴衣に身を包む暗れが
ましき、夕方から夜にかけての時間帯、焼きそば、
かき氷などおなじみの屋台が並び、おはやしが流
れ、人が独特のにぎわいを見せる空間、そして仲
間。近所の顔見知りの大人たち。思いがけず出会う
学校の男子たち。

彼女たちにとっての地域のお祭りとは、毎年かな
らず巡ってくる非日常だったのですね。

マンションの夏祭り

そもそも、マンションのお祭りに初めて行ったの
は、長女が六か月を過ぎたころでした。入居したば
かりで、右も左もわからなかったころでしたが、お

祭りの最後、恒例のビンゴ大会に四十〜五十人ほどの老若男女が集まり、番号が読み上げられるたびに一斉に上がる歓声や失望の声や、一喜一憂している姿が印象的でした（当然次の年から私たちもその中の一員となったのですが）。

次女一歳・長女三歳のころ

下の写真は次女が生まれた翌年に撮ったものです。駐車場の片側にゴザが敷かれ、反対側にはテントが二つ立てられ、飲み物や食べ物が配られています。奥は子ども会のゲーム会場となっており、ヨー釣りやスイカ割りなどが行われています。祖母が見立ててくれた浴衣を二人に着せて出かけると、近所の人に、

「あら〜、かわいいわ〜」

「大きくなったわね〜」

と声をかけていただいたり、同じくらいの年ごろの

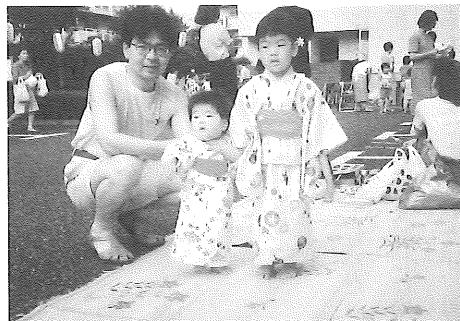
子どもをもつお母さんと初めてお話をしたりして、顔見知りが増え、翌日からあいさつを交わし立ち話をする相手がぐんと増えたものでした。

次女のオムツ替

えや離乳食、長女

の幼稚園通いなど、一日中二人の世話に追われていただけに、小学生が走り回り、やすやすとゲームやスイカ割りをする姿を目にし、今、こんなに手がかるわが娘たちも、数年後はかくも成長するものかと楽しみに思えたものでした。

このころ、娘たちの体の成長は著しく、浴衣の丈直しも毎年のことでした。梅雨のため、家にこもる



日が続く、気分転換にちよいど良いと去年の浴衣を出したものでした。最初のうちは物珍しさも味方して袖を通してじつと立って来ていた娘たちも、私を手間取ると、すぐに飽きて動いてしまい、特に一〜二歳の次女はじつとしていられませんでした。

彼女が嫌がつて座り込んでしまうと（やれやれ、こうなるとお手上げです）、さつきまでぐずっていた長女が急に「Kちゃん、ほらほら」と次女の機嫌をとって助けてくれたこともありました。丈を決めるだけの作業に蒸し暑さもあつて、毎年親子共ども汗だくでした。

次女三歳・長女小学一年生

次女が三歳となり幼稚園に入り、長女が小学校に入ってから、それまでの日常のこまごまとした世話から解放された一方、彼女たちがそれぞれの意思を年に数日の夏祭りに、はつきりと打ち出すように

なりました。「○○ちゃんと一緒に行きたい」「髪型はこうしたい」「浴衣をこの日は着たくない。あるいは、何が何でも着たい」などの要望を一応聞くだけは聞き、応じられない場合は話し合い、当日まで友達への送り迎え時間の調整などに、四苦八苦していたものでした。

子ども会でのお手伝い

一方で子ども会にも入り、ゲームで使うヨーヨー作りなど裏方のお手伝いをしました。二時間ほどで百五十個以上作ったでしょうか。娘たちも娘の友達も一緒に、コツをつかむまでは何度も失敗して、顔中水だらけになったことが今でも鮮やかに思い出されます。



また、打ち上げと称して親同士集い、互いの労をねぎらい、おしゃべりするのも楽しみの一つでした。親同士が顔見知りになり、「Mちゃんのお家はお母さんが平日夜七時まで働いている」、「Kちゃんのお家は上のお姉ちゃんが今年受験……」、と生活環境がわかると、親同士の連絡もずい分スムーズになりました。

自治会の役員として

自治会の役員になった年（任期は一年）は、ほかの住民の方と一緒に、数か月も前から何度も話し合いを重ね準備にいそしみました。

ささやかな規模であつても、主催する立場を経験することで、参加するだけでは見えなかつた苦労ややりがいもわかり、親しいご近所も増えていきました。また、ひとり暮らしや特別な事情を抱えている家庭があることは、自治会の活動を通してわかつて

きました。娘たちがひと夏越すたび、心身共に成長するように、私自身も子ども会や自治会の活動の中で、マンションという一つ同じ屋根の下でわが家とは異なるさまざまな生活が営まれていることを実感することができました。

公園でのお祭りでの出会い

八月のお盆明けは、わが家から歩いて数分の公園で商工会主催のお祭りが開かれます。公園の真ん中にやぐらが組まれ、その周りを地元の踊りの会の方々（年配の方が多い）が踊り、周囲には屋台が並び、焼きそばやかき氷などに行列ができます。

十年ほど前の夕方、娘たちを連れて涼んでいると、同じマンションに住むひとり暮らしのお年寄りにも偶然お会いし、かき氷をごちそうになったこともありました。大変恐縮したのですが、その後、道でお会いするたびにいろいろなお話を聞かせていた



く間柄となりました。最近お会いしないな、と思っ
ていたら、二年前に体調を崩され、親戚の方が住ん
でいる遠くの地へ移られたそうです。

夜の公園でのひととき

このお祭りに出かける時は、あらかじめ家から枝
豆やおにぎりを持って行き、屋台で焼き鳥や焼きそ

ばなどを買ひ、夕
食を済ませること

もありました。会
場の隣はブランコ
やすべり台や砂場
などの遊具があ
り、おなががいっ
ぱいになった子ど
もたちは、雪洞ほんぼりの
灯りに照らされな

がら遊びます。薄明かりでのブランコは子どもか
ら目を離すととても危険なので、そこで出会った近
所の母親同士で、目は子どもの動きを追いながら、
帰省中の出来事や夏休みの宿題の出来具合につい
ておしゃべりしたものでした。そのうち、仕事帰りの
父親が合流し、お祭りが終わるまでのひとときを夜
の公園で過ごしたものです。

夏の終わり

この公園での祭りが終われば、夏休みも残すとこ
ろあとわずか。晴れた日には浴衣を洗います。やれ
やれ、今年も大人も子どもも元気に参加できて、よ
かった、よかったと安堵し、汗まみれでところどこ
ろ泥がついた浴衣をていねいに洗い、さおに干し、
夕方取り込もうと庭へ出ると、顔に当たるかすかな
風に秋の気配を感じたものでした。

(鎌倉女子大学非常勤講師)

特集

子どもと祭り

祭りの服飾

和田 早苗

祭りの服飾とは

祭りに参加する子どもの服飾（衣服だけでなく装飾的なものも含みます）という点、どのような姿を想像されるでしょうか？

日本各地で行われている祭りにはさまざまな装いが見られます。その中でも、おそらく、イメージとして最も多く挙がるスタイルは、手ぬぐいの鉢巻をしめた法被（あるいは半纏）姿ではないでしょうか。

豆絞り（豆粒のような円を並べた柄）の手ぬぐいを頭に巻いた子どもたちが神輿を担ぐ姿は広く見られます。また、半纏の両腕に襷を掛けて背中で交差させ太鼓などを持つ地域もあります。

幼稚園や保育園で行われる祭りの一つ、運動会では、チームで色分けされた鉢巻やリレーの最終走者が掛ける襷が見られます。近年では、鉢巻をしめた法被（あるいは半纏）姿でお遊戯をする園も多くなりました。中には、丈夫な和紙や不織布を使って半

纏を手作りして、折り紙などを貼って装飾したものを着て踊るところもあります。

先に挙げたような「襷」「鉢巻」「法被」「半纏」は、現代の生活では日常的なもの、というよりも、むしろ、祭りなどの非日常的な時・場に見られる装いです。

では、これらの服飾はどのように用いられてきたのでしょうか。その変遷をたどっていきます。

襷（手襷・手次）

襷の歴史は古く、古代ギリシャの彫像にはキトン（一枚の布で身体の側面から前後を覆って肩でとめる衣服）にひもを襷掛けにした例（紀元前五世紀ごろ）があります。

日本でも古墳時代後期（五・六世紀）の埴輪像に襷を掛けたものが多く見られます。襷を背で交差させて両肩に掛けたもの、または、一方の肩から腰に

斜めに掛ける方法の二通りがあります。埴輪の姿は『古事記』や『日本書紀』の神話時代の服装の記述にはほぼ相当します。『古事記』の天の石屋戸の場面では、天宇受売命が天の香具山の日影の蔓を手次にかけて、真析の葛を鬘（後述しますが鬘は頭髮につける飾りのことです）として、蔓状の植物を襷や髪飾りにしたことが記されています。『万葉集』では神事に関係する場面で「木綿手次」が歌われています（木綿は楮などの樹皮をさらして作った繊維です）。ところが、古墳時代の主な衣服は筒形の袖の衣であり、袖をからげる必要はありません。したがって、古墳時代の襷は祭祀・儀礼の場で用いられたものと考えられ、それは今日まで神事・祭祀の場において継承されています。赤い襷を掛けた早乙女（田植えをする若い女性）が豊穣を願って苗を植える姿もこのような流れをくむものの一つです。

袖をからげるために襷が用いられた例として、平

安時代中期の『枕草子』^注一四五段「うつくしきもの」には次のように書かれています。

いみじう白く肥えたるちこの、二つばかりなるが、二藍の薄物など、^{まぬなが}衣長にて襷結ひたるが、^は這ひ出でたるも、また短きが袖がちなる着てありくも、みなうつくし。

数え年二歳くらいのも、とても色白でふつくらした幼児が、薄く織った二藍（青味がかつた紫）の、丈の長い着物に襷を掛けてはうさま、また、着物の丈を短く着た幼児が袖ばかり目立つような様子であちらこちら歩いているのもかわいらしい、と見ています。清少納言の子どもを慈しむまなざしが、千年の時を超えて伝わってくるような一文です。

近世以降、襷は主に労働の際、小袖の袂^{たもと}をたくし上げるために用いられ、現在でも和服姿で家事などを行う際に用いられています。また、八十八夜にあたる五月一〜三日ごろ、かすりの着物に「あかねだ

すき」を掛けた姿で新茶を摘み取る姿は、お茶の産地で見られる光景です。

鉢巻

「鉢」とは、頭や頭部の横まわりのことで、その部分に巻く布が鉢巻です。アジアで古くから行われていたといわれています。中国の史書『三国志』（三世紀末）のいわゆる「魏志倭人伝」には、日本の男女の服飾についての記述があり、男子は木綿^{ゆふ}を頭に巻いている風が指摘されています。これは、『古事記』や『万葉集』で「鬘^{かすち}」と呼ばれるものの原型にあたりと考えられます。鬘は神事にかかわりのある装身具で、男女共に行われていました。前述の『古事記』の真析の葛はこれにあたります。古墳時代後期の埴輪の男子像にも鉢巻風の飾りをつけたものが多く見られます。鬘は襷と同じく祭祀・儀礼の場に残っていきます。



鎌倉時代以降、武士は武装する際に烏帽子がずれないように鉢巻でその縁を巻きしめていました。江戸時代以降は主に頭髪の乱れを防ぐと同時に、額の汗止めも兼ねて職人たちの間で用いられ、現在でも広く用いられています。なお、手ぬぐいなどの布によりをかけ、結ばずに額に挟み込む「ねじり鉢巻」、細く折り畳んで頭に巻き、額の所で結ぶ「向う鉢巻」、後頭部で結ぶ「後ろ鉢巻」など、さまざまな巻き方があります。

また、五月五日の端午の節句には、男児の頭にシヨウブを巻き丈夫に育つよう祈願する風習があり、今でも続けられている地域もあります。

ちなみに、鉢巻をしめることによって衣服圧（衣服からの圧力）が発生し、適度な緊張感を与えられ、気持ち引き締まるという効果があります。鉢巻に願いを込めて、また、集中して何か（たとえば運動会の競技など）に臨む際に、鉢巻をしめることによって心身共に引き締まるのです。

しかしながら、あくまでも加減が大切で、きつい圧迫は健康に悪影響を及ぼしてしまいます。

法被

半纏（半天・裨纏）

法被も半纏も羽織に似た、はおりものの一種です。江戸時代から用いられています。現在、法被と半纏はほとんど区別のないものとして扱われること

が多くなっていますが、法被と半纏には幾つかの違いがあります。

法被は広袖（袖口の全体が広く開いた袖）で、衿は羽織のように折り返して着ていました。生地は木綿で紺色は少なく、薄い藍色や茶色が多く用いられ、丈は本来ひざぐらいまでのものでしたが、後に長くなります。背中に大きく家紋や記号などをつけたので「看板」ともいわれました。もともと、武士の間（奉公人）が上着として、また、出火の際に火事装束として用いていたものが職人たちに広まったものです。しかし、文化期（十九世紀初め）ごろから「印半纏」が法被に代わって職人たちに仕事着として用いられるようになっていきます。印半纏は、紺の木綿製で、紋や屋号を示す「印」を衿や背に白く染めぬいたものです。これにより、法被と印半纏の形態も名称も混同されるようになっていきます。

半纏は、防寒用・仕事着として庶民に多く用いら

れてきた丈の短い上着です。天保（一八三〇・四四）中に女性の羽織が禁止されたため、代わりに半纏が広く着られるようになりました。羽織や法被と異なるのは、衿を折り返して着ないこと、脇に襠（幅を出すために足す布）がつかないことなどです。襠がなく着ると窮屈なので「窮屈羽織」とも呼ばれました。半纏には、材質や袖口の大きさや丈などが異なるさまざまな種類のものがあります。たとえば、「蝙蝠半纏」は丈が短く、袖丈の長い木綿製のもので、旅商人が合羽の代わりに用いていました。「革半纏」は背に家紋や記号をつけた革製のもので、防寒用・火事場用として着られたものです。「ねんねこ半纏」は厚い綿入れの広袖のもので、子どもを背負った上からはおろることができるように仕立てられています。

印半纏は、雇主が使用人や出入りの職人に「仕着せ」として与えたもので、明治以降は職人たちが着

用しただけでなく、商店や会社などさまざまな現場で仕事着として使用されてきました。仕事用のものは昭和四十年代ごろからしだいに減っていますが、その伝統は「祭半纏」の中に受け継がれています。祭半纏は印半纏と同じように家紋や地名などの文字を背中や衿に白く染めぬくものです。

服飾は時代と共にその形態や名称が複雑に変化していくのですが、現在、各地の運動会や祭りでは一般的に着用されているものは、本来の形態から考えると、法被というよりも半纏と呼ぶ方がふさわしいようです。

おわりに

運動会は、年少組にとつては年中・年長組の姿がとても頼もしく見える日で、一年後、今度は自分が年少組の子たちから同じふうに思われる存在となり……と、その繰り返しが行われていく場でもあ

ります。一方、各地の祭りは、地域に伝わる文化などが——少しずつ形を変えつつも——継承されていく場でもあります。

これからもそのようなさまざまな「襷」が次世代へとつながっていくことを願っています。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
研究院 研究員・附属中学校非常勤講師)

注 清少納言『枕草子』へ新編日本古典文学全集18〈

小学館、一九九七年、272頁より引用

参考文献

・谷田関次・小池三枝著『日本服飾史』光生館
一九八九年

・喜多川守貞著『守貞謄稿』第二卷

・朝倉治彦・柏川修一編、東京堂出版、一九九二年

・丹羽雅子・酒井豊子編『着心地の追究』へ放送大学教

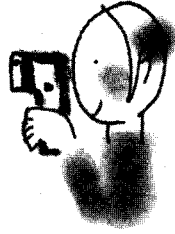
材〈放送大学教育振興会、一九九五年

『日本民俗大辞典』上・下 吉川弘文館、

一九九九年・二〇〇〇年

・「半纏」しごと着・礼服・きずな」展解説書

豊田コレクション 深川江戸資料館、二〇〇六年



保育の中の物語(10)

「二人で」から「一緒に」へ

樹上に揺れるミカンの実が

教えてくれたこと

岸井慶子

三年保育の年長組の秋。「あー、先生、先生、そこー、実、実がはえてる」とA男が東屋あずまの竹垣に乗って叫んだ。「実が、はえてる」という言い方が面白くてカメラを向けた。A男の言う通り、見上げたミカンの木の葉の間から、ちようど伊予柑ほどの大きさのきれいな黄色の実が見える。

呼びかけに応じて保育者が走ってくる。そして、すぐ脇にあるつるバラのとげを気にすると「痛くないよー」「バラのとげをさ、全部はずせばいいんじゃない」などと口々に威勢のいいことを言う。実を発見した興奮が伝わってくる。

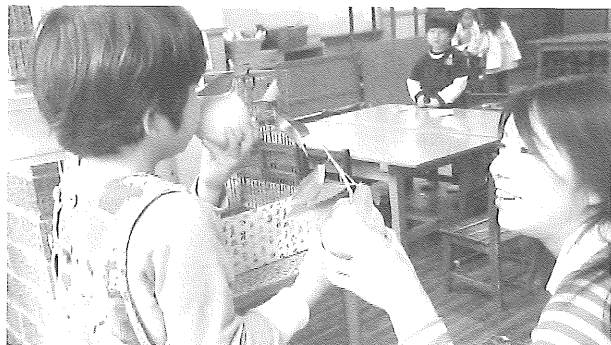
その後はこちらの予想通り、砂場用レーキ、庭掃き用の長柄ほうき、落葉を集める熊手などを持ってきて試す。届かないとわかると、二本をつなげたり、



時には下から放り投げたりする。保育者の肩に乗ってもみるが及ばない。木に登ろうとするが、なかなか難しい。そのうち、最初の発見者たちはほかの遊びへと抜けていき、U男一人が木登りに成功した。

「ウアー、やったー。やった。ねーえ、誰かー」樹上からU男が叫ぶ。少し離れた所に実が転がり落ちた。少し前に落ちたもう一つと合わせて二つを、樹の下にいたD男がゆっくりと拾い上げ、庭の隅で水やりをしている用務員さんの所に持っていく(多分、この時、U男は樹から下りることに集中して、D男の行動は見えていない)。U男が樹の上から下りてきた。自分の「ミカンが用務員さんの手に渡っていることを見つけると「えーっ、おれがとったんだよ」と走りだし、大声で何やら説明し、用務員さんから葉付きのミカン二つを取り戻す。D男は何も言わず、その場から立ち去る。

その後、U男は幼稚園中のクラスと保健室を順番に回り、担任と周囲に集まってくる幼児たちにミカンを見せながら「おれ、一人でとったんだよ」「両方一人でとったの」「必死でとったの」「ぐらぐら揺れる竹垣に乗って、おサルさんみたいに」と、自分が、一人でとった喜びと誇らしさを表し、受け止めてもらう。保育者が「木に登ってとった人は初めてよ。高枝切りでとったことはあったけど」と言うとも、おれは木登りでとったの」と誇らしく言う。



四歳児には「とげがあつて危ないから無理」と言う（最初に保育者からとげを心配されたことがこでつながる）。また、保育者とのやりとりから「いいにおいだよ」「かいでござらん」「ミカンの下の部分に鼻をつけながら」ここが「いいにおい」「（葉は）あんまりいいにおいじゃないよ」など、ミカンの香りへの気づきや言葉が聞かれるようになる（最初のクラスから最後の保健室に行くまでの間に、説明や誘い方が変わっていくのがわかる）。

そして、「これをどうするの？」という問いをきっかけに「みんなで食べるの」「みんなに分けてあげようと思つて」「一人一個ずつ、ほら中に入つていでしょ（ミカンの房をイメージしているらしい）」という言葉が聞かれるようになる。初めは保育者の問いへの答えとして、途中からは出会った友達に自分から説明する言葉として（この辺りから、U男の心の中に「ほかの人」が存在し始めたのではないだろうか。そして、二個のミカンではどうも足りないのではないかと思ひ始めたように感じられた）。

U男はミカンを自分の保育室の机の上に残し、再び庭に出ていく。もうミカンの樹の周りには誰もいない。樹の上を見上げ、ポケットに手を入れ、周囲を見回し、誰かを探しているようだ。先程までの意気揚揚とした自信に満ちた姿とはまるで別人のようだ。少し寂しげでもある。



少しして、U男は庭の奥で遊んでいるD男を見つけ、D男の所に行って何か話をする。すると、D男は仲間に「ちよつと手伝つてくるから」と断り、遊びを抜ける。U男も「すぐ終わるから」と言葉を添え、二人はミカンの樹の下までやつてくる。

U男ではなくD男が登ろうと、何度も何度も必死に挑戦するが、なかなか登れない。(手伝いを頼んだ時に、何か約束でもしたのだろうか) U男はD男のお尻を下から両手で支えたり、励ましたり、少し離れた所から実のある位置を確かめたり、先に登って「ここに置いておくから」とほうきを枝に乗せたりする。決して、自分がわれ先にミカンの実をとろうとはしない。結局三つ目のミカンは収獲できなかった。

「自分が一人で」とった」から「みんなに」分ける」「一緒に」食べる、とる」への変化がよくみえた事例だ。この日、偶然にもU男の一番の仲良しが欠席だったことも、このエピソードの背景にはあるだろう。七人の保育者がそれぞれに対応の仕方で「すごいねー」とU男の気持ちに共感しながら、少しずつU男の世界を広げていった。「自分」を抑えて「みんな」になったのではなく、「一人で」が充分に受け止められて「みんな」や「一緒に」が生まれるのだと、再確認した。

(鎌倉女子大学短期大学教授)

園長のまなざし

第10回

母の思いと教師の心もち

田畑智枝

秋の気配が感じられる朝、今日は保育参加です。数名の保護者が先生として一日、子どもたちと過ごします。お母様と一緒にのがうれしくて、ニコニコ顔もあれば、ちよつぱり緊張しながら登園してくる子どももいます。

保育参加の後、毎回保護者にコメントを書いていたのですが、親の気持ちと教師の立場での思いの違いを、若い教師が学ぶ良い機会にもなっています。

数日前から、「ママは幼稚園にいつ来るの？」と楽しみに待っていた息子と、張り切って登園しました。ところが息子は私にべつたりでガツカリです。しばらくして園庭で鬼ごっこが始まり、私は年甲斐もなく本気で走り回り、くたくたです。お帰りの着替えでは、誰にも手を貸すこともなく、みんなの成長ぶりに驚いてしまいました。息子は誰よりも早く着替えが終わり、本を読んで待っていました。少し暇そうに見えました（ある母親のコメントより）



「自分の子どもが早く着替えができて、お母さんはあまりうれしくなさそう」「お母さんは、お着替えよりほかの所に気持ちがいつってしまうのかしら」「一番なんてすごい！ って褒めてあげてほしいわね」と、若い先生たちは子どもの気持ちばかりが気になり、母親の心情は、なかなか理解しかねているようでした。

お母様の気持ちは複雑なものです。子どもの性格も、心もちもよく知っているのに、頑張っていることを素直に喜べないのも親心なのでしょう。後できつと気付かれたと思いますけれど、親の欲目でつい期待してしまうのですね。

何気ない言葉かけも、意味のないように見える遊びも、子どもたちにとっては、心に残る大切な言葉や遊びで、全て学びの場なのです。何回か参加するうちに子どもの成長ぶりに驚かれ、お母様を見る目が変わり表情も優しくなるのが何よりうれしいことです。

(新松戸幼稚園園長)

子ども文化の詩学 (5)

おもちゃの命

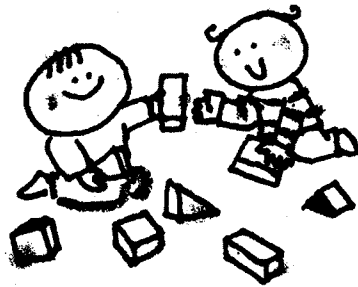
— 子どもの相棒としての —

森下みさ子

◆ 「良いおもちゃ」という問い

「子どもにとって、良いおもちゃを紹介してほしい」と頼まれることがある。その時、わたしの頭の中では「良いおもちゃって？」という問いが、見つからない答えを求めてぐるぐる回っている。

遊んで楽しいおもちゃはある。好きなおもちゃもある。好きだったおもちゃはたくさんある。それらはどれもこれも相棒のように親しんだものだから「紹介したい」と思うものの「良いおもちゃ」なのかどうか、今一つ確信がもてない。私が遊んで良かったことは確かだが、どの子にとっても良



いおもちゃなのかどうか……。そもそも「良い」とは何をもって判断したら良いのだろうか？

子どもの発達を促すようなおもちゃは「良いに決まっている」という時、おもちゃという物だけに焦点が当たっているような気がしてならない。

果たしてそれで良いのだろうか？ たとえば、木でできた積み木は、そのシンプルな造形ゆえに、多くの想像力を注ぎ込む余地がありそうだから、「良い」と評価される。しかし、その積み木が子どもの関心を見捨て無視して無理やり与えられ、それらを使って何かを作るように指示されたとしたら、それは、良いおもちゃどころか「おもちゃ」でさえなくなってしまうだろう。「おもちゃ」とは、その語源が明かすように「手で持ち遊ぶ物」、すなわち「遊び心」と共に活き始めるものだからである。「……しなくてはいけない」……ができるようになる」といった目的に目が向く時、遊ぶこ

と自体が目的であるはずの遊びは「遊び」ではなくなり、同時に遊び心を失ったおもちゃは「おもちゃ」ではなくなってしまう。とはいえ、私たちはおもちゃが子どもの良き遊び相手であり、おもちゃで遊ぶことによって多くのことが体験されていることを知っている。とすれば、子どもとおもちゃのかかわりの中で何が生じているのか、おもちゃを物として見るのではなく「おもちゃで遊ぶ」という現象そのものの深部に目を凝らす必要があるのではないだろうか。

◆おもちゃの命

大学の講義で、学生たちに「良いおもちゃ／悪いおもちゃ」を、理由をつけて挙げさせると、判を押したように「良いおもちゃ＝木でできた積み木」「悪いおもちゃ＝流行玩具・ゲーム」という答えが返ってくる。前者は想像力をはぐくむのに

比して、後者にはその要素がないというのが、お
おかたの理由である。しかし、この後「自分が子
どもだった時に、夢中で遊んだ遊び相手としての
おもちゃは、何だったか」と聞くと、ファッシュヨ
ンドールや流行玩具、ゲームの類が次々と挙がっ
てきて驚かされる。理想と現実のギャップに驚く
だけではない。

もつと注目すべきは、これらの問いに対して答
える学生の雰囲気の違いである。「良い／悪い」
の時は、個々に頭をひねって考えているのに対し
て、「子ども時代の相棒としてのおもちゃ」を思
い起こしてもらう時は、実に活き活きと楽しそう
だ。自分も親しんだおもちゃの名前が出てくる
と、よほどうれいのだらう、あちらこちらで歓
声が上がるとの盛り上がり方をする。結果とし
て、最初の問いでは「良いおもちゃ」には挙がっ
てこなかった人形や流行玩具が、かつての子ども

であった学生たちの口をついて、次々と浮上して
くるのである。

もちろん、楽しかったから良いおもちゃだとは
いえない。それに、学生たちがありありと思いつ
せるおもちゃとのつきあいの時期は、小学校に上
がってからが多く、それ以前のおもちゃとなると
記憶に薄いため、相棒とまではいえないのそもし
れない。ただ頭で考えたおもちゃの良し悪しと、
実際におもちゃで遊んだ楽しさの記憶とは、必ず
しも一致しないのである。さらに聞いてみると、
流行玩具でもゲームでも、私たち大人が外見のみ
で批評するよりも、もつといろいろと工夫を凝ら
して友達と一緒に楽しんでいる場合がある。ゲー
ムの中には達成感や深い感動をもたらすものもあ
るようだ。

流行玩具が一過性にすぎないのは、むしろ、子
どもたちとおもちゃとの関係を、短期間で一方的

に切ってしまう玩具市場のほうに問題がありそうだ。ゲームにしても、問題となるのは、やり始める時期と、内容と、遊び方によるのではないだろうか。

教材として用意された積み木であれ、大人が眉をひそめる流行玩具であれ、あるいは批判の対象となりがちなゲームであれ、子どもが夢中になって遊んでいる時、子どもはもちろんのこと、その遊び道具も間違いなく活き活きとしている。子どもの遊び心を吸い込んで、おもちゃの命が脈打っているように見える。創られた意図が違うとか、一過性のものにすぎないとか、想像力が育たないとか、さまざまな批判があらうとも、子どもとおもちゃが共に活き活きと遊んでいるということには、まずは認めなくてはならないだろう。そのうえで考えるべきは、物がかかわって遊びが展開している時、子どもが体験していることの本质は何

かということと、子どもはその本質とどのように出あつていくことが望ましいのかということだろう。

◆「おもちゃで遊ぶ」本質

「おもちゃ」という言葉の由来である「持ち遊び」は、おもちゃが手を使って遊ばれるものであることを暗示している。小さな子どもが手に触れる物、何でもいじくり回して「おもちゃ」にしてしまう時、手で触れることで、おもちゃとしての命を物に注いでいるのが見てとれる。逆に、先程の例のように、頭だけで「良いおもちゃ」を考えている時は、なかなかおもちゃの本質に触れることができない。一方で、触覚とは無縁に思えるゲームでも、夢中になって遊ぶ子どもたちにとっては、コントローラーをいじくり回してわが物とすることがいかに大事か、コントローラーと手と

の間にしつかりと関係が結ばれている。遊び手がいじくることによってコントローラーはおもちゃとしての命を発揮しているのである。

「手で触れて遊ぶ」ということに着目すると、五感の中でも、触覚が異質であることに気づかされる。ほかの感覚が外部の対象を対象として受け止めるにとどまるのに対して、「触れる」ことは同時に対象にかかわることであり、対象と共に在ることだ。まして、遊び心が注がれたおもちゃとの関係は、共に遊ぶ仲間となり、相棒となることといえよう。

「見る」「聞く」「嗅ぐ」「味わう」が、「見分ける」「聞き分ける」のように、「分ける」という言葉とつなげて用いられるのに対して、「触れる」だけは「分ける」になじまず、つなげて用いられる語は「合う」である。「触れ分ける」とは言わないが、「触れ合う」ならわかる。思い起こす

と、私たちはおもちゃと触れ合って遊び、おもちゃを介して他者と触れ合って遊んできた。とすれば、「おもちゃで遊ぶ」ことの本質は、遊び心を活かしながら、モノとヒトと触れ合う〈場〉が生じることではないだろうか。

松田恵示は、子どもたちが生き活きとおもちゃで遊んでいる状態を観察して、そこには「子どもが、他者（他の人）とモノ（おもちゃ）と自己が溶け込む、という独特の關係^{注1}」が生じているのではないかとして、「『自己』『他者』『おもちゃ』が『溶け込む』状態、つまり『おもちゃの三角形』^{注2}」が成立しているのだと説く。人が道具を使う時のような対象物に対する関係ではなく、互いに触れ合って活き活きとした関係の場が開かれている状態こそが「おもちゃで遊ぶ」ということだ。だから、「良いおもちゃ」という物が固定されているのではなく、「おもちゃと共に良い関係が生じて

いる」状態が求められるのであろうし、その体験こそは、この世界においてヒトとモノとのかかわりの中に自分自身を息づかせていくことにつながるだろう。「自己」―他者―物」の関係の場が気持ち良く体験できることにおいて、子どもはこの世界に在ることを積極的の受け止めていくに違いない。対象物を分類・分析して「わかる」ようになる以前に、まずは「触れ」「合う」ことよって関係を生きる、その体験こそが「おもちゃで遊ぶ」ことの本質ではないだろうか。

そう考えると、このおもちゃで遊ぶと〇〇が育つということも、結果としてはありうるが、あらかじめ目的として掲げることなのかどうか……。それによって「おもちゃで遊ぶ」こと自体の楽しさが失われないようにしなくてはならないだろう。また、モノに触れて遊び心が揺さぶられることから「おもちゃで遊ぶ」本質が起ころとすれ

ば、電子空間を媒介とするゲームよりは先に出あうべきおもちゃがあることもわかる。「おもちゃの三角形」が産み出す関係の場に包まれる体験こそ、真つ先に優先すべき体験であることは確かだ。そのためにも、私たち自身が子どもとおもちゃと共に遊ぶことの楽しさを体験すべきだと思う。「おもちゃの三角形」の一端を担って、子どもとおもちゃとのかかわりの中に共に在ることによって初めて「おもちゃで遊ぶ」ことの本質が実感されるだろう。何に役立つかはわからなくとも、活き活きした関係の中に溶け込む心地よい体験こそ、この世界に在ることの根っこをつくってくれているに違いないのだから。

注

(白百合女子大学文学部児童文化学科准教授)

1・2 松田恵示著『おもちゃと遊びのリアル』世界

思想社、二〇〇三年より引用

第3回

ツブキ先生の虫のつぶやき

アカトンボの季節は秋？

津吹 卓

秋です。アカトンボの季節ですね。今年は、もう会えましたか。え？ まだですって？ では、会える場所をお教えしましょう。一つは電線です。上の方を見てください。視線は正面ではなく、上なのです。うまくいけば、たくさんと同じ方向を向いたトンボが電線に並んで止まっているのを見ることができます。また、ちょっとした丘陵地の木々の枝先や、田んぼなどに立っている棒の先も良いですね。ただ、東北地方などでは最近めっきり少なく

なったという話も聞いています。稲の作り方が変わり、そのためではないかとも言われています。では、アカトンボについて見ていきましょう。

第一問 アカトンボってどんなトンボ？

もちろん「体が赤いトンボ」？ でしょうか。実は「アカトンボ」という名前のトンボはいません。答えは体が赤いトンボのうちの数十種類をアカトンボ類（アカネ類）と呼んでいるのです。僕

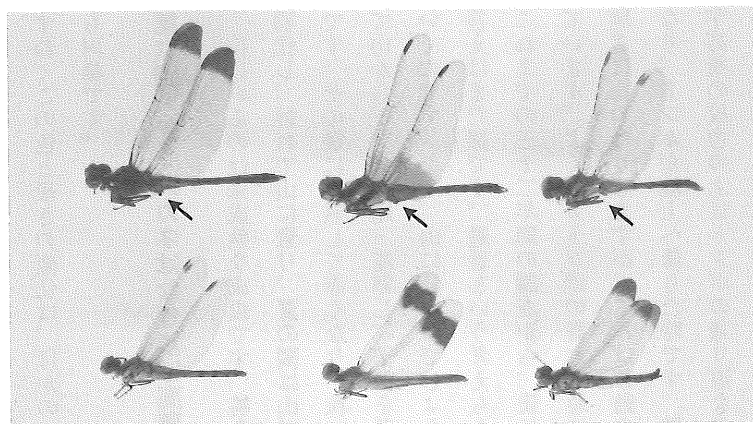
の住んでいる東京の郊外（日野市）でも、現在は七種類が普通に見られます。特に多いアキアカネはアカトンボの代表で、マユタテアカネ・ネキトンボ・ミヤマアカネなども結構見られます。ノシメトンボやナツアカネもいます（写真）。

第二問 雄と雌の違いは？

最もわかりやすい答えは、雄の腹部の基にある突起です（写真矢印部分）。精子をためる袋なので、僕は子どもたちには「オチンチン」と言っています。子どもはニコツとしてすぐに納得するようです。

第三問 アカトンボって本当に秋の虫？

夏の高原に、体がオレンジ色のトンボがたくさんいるのを見たことがあります。あまり機敏ではないので、手でも採れたりします。これもアキアカネです。オレンジ色でも「赤トンボ」なのです。答え



▲写真：アカトンボの仲間の羽の模様の違い
 上段（雄）左：ノシメトンボ（羽先が茶色・大型）中：ネキトンボ（羽の根本が黄色）
 右：アキアカネ（模様無し・大型）
 下段（雌）左：ナツアカネ（模様無し・小型）中：ミヤマアカネ（羽の中間が茶色）
 右：マユタテアカネ（羽先が茶色・小型 模様の無いものもある）

は夏の始めには、もう親になつて居るのです。

ここからは、アキアカネを中心に話を進めます。

第四問 アキアカネ(親)は

何日くらい生きて居る?

トンボの幼虫はヤゴで、池や水田にいます。東京では、アキアカネは六月下旬に親になり、十二月の始めまで長生きするものも見られます。答えは約半年です。

第五問 なぜオレンジと赤いトンボが居る?

ヤゴから羽化して親になつても、まだ性的に成熟していません。つまり交尾して卵を生むことはできません。答えは未成熟の時はオレンジで、成熟してくると体の色が赤に変わってくるからです。特に、雄が顕著です。また、若いうちは体も柔らかくで弱く、成熟するにつれて硬くしつかりしてくるので

す。赤ちゃんと大人の「ほほの違い」のイメージです。この色と硬さの変化は、ほかのアカトンボでも同様です。

第六問 アキアカネはなぜ夏は高原に居る?

山に居るのは未成熟な成虫です。答えは、初夏に羽化し、群れで山に登り、夏の間は山で暮らすからです。その後成熟して赤くなり、秋に群れになつて山から下り、交尾・産卵し、子孫を残して死んでいくのです。なぜ、山に登るのでしょうか。実は、答えはまだ謎です。避暑という考えもありますが、これまでの三十二年間の調査から、僕は違うと思つて居ます。よくアカトンボの群れが急に街に現れて騒ぎになったりしますが、これは移動の途中で夜になり、トンボが地上へ降りた時です。勤務先の十文字高校の校舎の上はトンボの通り道なので、たまに学校がトンボであふれることがあります。同じアカ

トンボでも、羽化した場所からすぐ近くに移動する種と、平地から高原にまで移動する種があり、アカネは後者の典型的な種で、ノシメトンボも一部は長距離移動をします。

第七問 初夏から晩秋まで気温の変化は大きいけれど 体調は平気？

暑いところにいるトンボは高温に耐え、また体温が上がるのを押さえる能力を発達させているようです。秋に気温が低くなると、この能力は不要になります。答えは環境に合わせて体温調節ができるようです。トンボは時々、面白い格好をします。それは「逆立ち」です。



第八問 アカトンボはなぜ逆立ちをするのか？

アカトンボを見ると、朝な

ど、まだ気温が低い時は日光浴をして体を温めています。昼間、日向で日が当たると体温も上がり、トンボも暑くなってきました。日陰に入ればいいのですが、できれば動きたくないようです。そんな時は、急に腹部を立てて逆立ち（上のカット参照）をします。腹部の先は太陽の方を向いています。つまり、普通に止まっている姿勢から逆立ちをしようと、太陽に照らされる部分が体全体から腹部の先だけに変わります。測定してみると、逆立ちをした瞬間に体温がスーッと数度下がります。答えは暑いので体温を下げるためです。ものぐさ(?)なのは人もトンボも同じですね。

成虫になって長い間生きるのは、アカトンボにとって大変なことのように、苦勞して一生懸命に生きています。

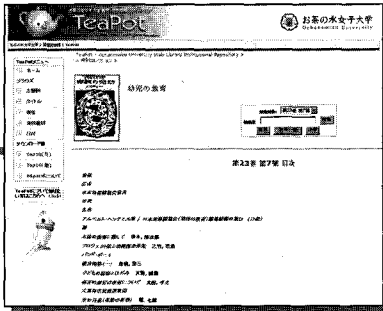
(十文字中学・高等学校〈理科/生物〉)

十文字学園女子大学児童幼児教育学科非常勤講師)

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (10)

読み手の倫理観

吉村 香



お茶の水女子大学附属図書館の WEB サイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション（略称 TeaPot）」にてバックナン
バーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼研究と資料収集

『幼児の教育』がネット公開されることになったことを知ったのは、昨年（二〇〇八年）の第九号誌上でした。その後、『幼児の教育』誌上で紹介されるネット公開に関する記事を拝読してまいりましたが、中でも本田和子先生の力ある問題提起には、保育研究者として先行研究に襟を正す思いでありました。保育の研究者を志した自分の原点に立ち返る機会となりました。

一方、「宝の山」が掘りやすくなるという豊田一秀先生の論考ももつともだとなすいたものです。では、私にとって『幼児の教育』がネット上で閲覧できることはどのような意味があるだろうか、このたび、改めて自問する機会をいただきました。

私はお茶の水女子大学の大学院に入る前、東京都内の某私立大学の教育学科に在籍していました。いわゆる教員養成の学科で、幼稚園教諭の養成課程もありましたが、図書館には『復刻版幼児の教育』のほんの一

部があるだけでした。私は卒業論文のテーマを氏原銀

の実践史とし、図書館のカウンターで手渡された「○巻を所蔵している一番近い大学は○大学、△巻は△大学」と書かれた紙を手に、「幼児の教育」を訪ね回る日々を送ったのです。明治当時の保育界の動向を理解するのにもつとも頼りとなる『幼児の教育』は、当時の私にはなかなか手が届かないという意味で、大変貴重な存在でした。手にするまでが苦勞の連続だったわけです。そのうえ、貸し出し期限内しか手元に置けないし、おびただしきコピーを整理しながら読むことも、まだ慣れていませんでした。そして何より、全巻そろっているのを目にすることがなかったので、自分に必要な記事を特定すること自体が難儀なことでした。もちろん返却にも交通機関を使って足を運ばねばなりません。その後、お茶の水女子大学に入ってからはそのようなことがなくなつたので、懐かしい思い出などと言えます。また、研究の「いろは」を学ぶ過程でほかに替えがたい原始的な苦勞ができたことは貴

重な体験であつたと考えています。

けれども全国の多くの学生、研究者が今もなお、同種のご苦勞をなさつて保育研究に取り組んでおられるだろうと思いはせるにつけ、それは誰にも必要な苦勞なのだろうかと首をかしげるところでもあります。ですから、『幼児の教育』がネット公開されたことを、私は大変喜ばしく感じております。

しかしすでに指摘されているとおり、ネット公開によつて資料入手の苦勞が払拭されることで、先行研究への畏敬の念が薄れる可能性は大いに懸念されることろでしょう。ただでさえ、先人の成果をきちんと踏まえて研究の歩みを踏み出す研究者としての倫理感が、保育学徒には欠けていると、日本保育学会でも大会を運営する先生方が頭を抱えておられるのが現状です。けれど、保育学徒の研究者倫理については、実はかねてより重要課題であつたはずですから、懸念を共通の目標にすげ替えて、保育研究のさらなる発展に向けて努力すべき時期がきたのだと考えることもできるで

しょう。

『幼児の教育』のネット公開によって、先人の言説に触れやすい環境を手にしたのですから、その環境を享受する者は研究者としての倫理観を問い直し、先人の言を踏まえて研究に向き合う経験を自らに課さねばならないでしょう。それは、一研究者の分をわかまえる謙虚さといってもいいかもしれません。

▼ネット活用によって見えてくるもの

卒業論文で氏原銀の実践史に取り組んだ懐かしい日々を思い起こしながら、「氏原銀」を検索してみました。学生時代の私に見せたら狂喜するであろうほど、その画面には見事に氏原女史の著した論考や童話の題名が並びました。第二十九巻第十号（一九二九年十月発行）の「静岡市私立櫻花幼稚園に付て」に始まり、氏原女史が（たぶん）持ち前の積極性、機動力によって各地の保育現場を視察し学んだ足跡が散見されます。また、第三十巻第六号（一九三〇年六月発行）の

論考「保育用人形芝居を観て」や第三十一巻第一号（一九三二年一月発行）の「郡山市立郡山幼稚園の自然物應用手技に就て」のように、保育内容に関する実践者としての熱く深い研究心もうかがえます。長い長い時を経てなお、「一人の保育者」という真摯な生き方を見せつけられる思いです。

題名に惹かれて、幾つかの論考を選んで印刷してみました。選ぶ際、分厚い復刻版を何冊も並べてあちらの記事、こちらの記事と読み比べる労力が夢のように遠のいていることに気づきました。自分に必要な、手に置いて保管すべき記事はどれなのか、印刷物を読み比べて選ぶ作業はあまりに簡便で、ネットというツールが格段に効率を高めたことを実感しました。

今、私の手元にまとめた印刷物の束は、『幼児の教育』を私の視点で切り取った一つのまとまりのある歴史です。時間軸をさかのぼったところに点在していた氏原女史の足跡をつなげることが、現代に至って実現された証であります。別な視点を差し挟まない純粹性

は、注意を怠ると独断性を帯びてしまうかもしれません。簡便に得た資料の扱い方を私の当面の倫理として、慎重な読み方、解釈に留意するつもりです。

保育学徒は少々倫理観に欠けるところがあると申しましたが、それは子どもをいとおしむ者の「善さ」のようなものを自意識にもっているせいではないかと考えます。悪気はないけれど、先行研究を吟味せぬまま自論を展開してしまう。倫理的でありたいと願うことをうっかり忘れ、なぜか自分は倫理的であると信じているところが、感覚や体質の変わらなさをもたらししているのではないのでしょうか。

ネットの使い勝手の良さは、それを私たちが利己的に用いるためにもたらされたのではなく、これを機に私たちがもう一度、開発された技術に知恵をもって臨むチャンスを与えてくれたのだと考えます。保育実践も保育研究も、歴史の先端に今の私たちの営みがあります。画面で見られる保育の歴史が、今ここにある私たちの営みと直結したことで、読み手である私たちの

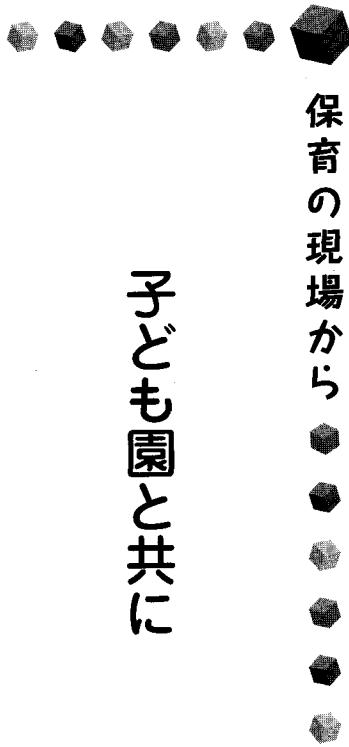
「自由」が幅をぐんと広げました。自由を謳歌すると同時に伝統と今をつなげる仕事にどのような制約を敷くべきか、私たちが問われているように思うのです。

▼『幼児の教育』これからへの期待

集団施設保育の枠を出て、広く社会全体が子どもの位置づけを模索しています。不況の影響もあつてか、支援の旗のもとで子どもは時として、小荷物のように預けられ、または、「どこか」に預け先を探されています。『幼児の教育』はいつの時代にも社会の現状を受け止め、伝え、読者と共に模索の出口を考え合う専門誌であり続けてきました。

明日の保育をどうするかという保育者の「今日の迷い」に即答しようとする保育雑誌が氾濫している。今、『幼児の教育』は、この混迷の時代の保育関係者が省察を交える場であり続ける、その使命を受け継いでいただきたいと願ってやみません。

(千葉経済大学短期大学部こども学科准教授)



保育の現場から

子ども園と共に

大川 理香

子ども園開設

新宿区では、四谷子ども園の開園に向け、プロジェクトチームを中心として準備を進めてきました。さまざまな準備を行う中で、私は「保育・教育計画」の作成メンバーとして幼稚園教諭と共に討議を積み重ねてきました。

新宿区の幼保一元化の理念の一つに「幼稚園の文

化と保育園の文化を融合し、あらたな価値を備えた子どもの育ちの環境を創造する』があります。どちらかの文化に束ねられてしまうという印象をもたれないようにするために、保育・教育計画を立てる際の言葉の使い方一つについても配慮し、討議しました。

たとえば、これまで幼稚園では「幼児」、保育園では「乳児と幼児」と分けていましたが、子ども園

では全体的にかかわることについては「子ども」という言葉をつかいました。また、指導計画に記載する「予想される活動」の中の「活動」という言葉には、乳児期は生活の部分の比重が大きいこと、幼児期は遊びとしての活動の意味合いが多くなることを踏まえ、「生活・遊び・子どもの姿を全て含める」ということにしました。

このように細かな点まで共通認識をしたうえで、子ども園は平成十九年四月にスタートしました。

生活の違いに対する戸惑い

実際に開園し子どもたちとの生活が始まると、想像以上に戸惑いは大きなものでした。

幼稚園と保育園と二つの機能を兼ね備えている子ども園は、生活スタイルの違いがある子どもたちと一緒に生活していきます。そのため、保育者や保護者、そして子どもたちにもさまざまな戸惑いがあり

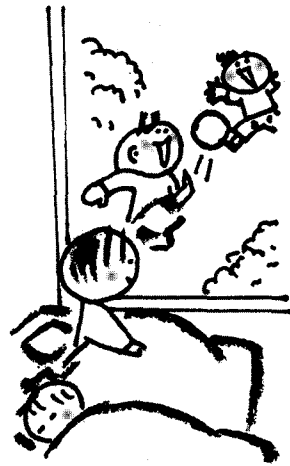
ました。電化製品などでは二つの機能を兼ね備えていると便利だと感じます。しかし、子ども園は、子どもの生活の場として、幼稚園としての機能、および保育園としての機能のどちらにも良い環境を保障しなくてはならず、不便に感じるものが多くありました。

子ども園での生活は、〇〜三歳児までは保育園と同様となっており、四・五歳児の生活は生活スタイルに合わせて選択できるようになっています。七時半から二十時半の開園時間のうち、九時から十五時の教育時間だけを選択している短時間保育児、十六時半までの中時間保育児、そして保護者が就労している長時間保育児の三つの基本スタイルがあり、さらに預かり保育もあります。保育者は、子ども一人ひとりの生活のスタイルを把握して園生活を保障していくことが必要ですが、これが実際には複雑であり、保育者には「どのように動いたら良いのか」と

いう戸惑いがありました。

さらに、子どもたちの遊び（教育）の充実を第一に考えてきた幼稚園教諭にとっては、教育時間内にお昼寝の時間があるということ、子どもたちの保育教育時間が勤務時間より長いということ、そして当番のための時差出勤や、土曜勤務のための振替の休みが平日にあるということなど、子ども園と幼稚園ではシステムの違いが多く、これらを理解していくまでに時間がかかりました。

五歳児は、幼稚園教諭の担当するクラスと保育士が担当するクラスの二クラスがあります。保育教育内容は打ち合わせをして共通化しています。日によって異なる職員の体制の中で、どのように共通化した活動内容を進めていくか、そのためにはどのような保育者が動くことが必要であるのかを表にしながら、毎朝確認することが日課となりました。お昼寝をする子どもとお昼寝をしない子ども。おやつを



食べずに帰る子どもと食べてその後も遊ぶ子ども。子どもたちの生活のスタイルが違うため、それを保障していくことは開園前に想定していた以上に大変なことでした。

生活の違いによる戸惑いを感じたのは、保育者だけではありませんでした。子どもたちも、これまでの生活との違いを感じていました。

「お弁当」から「給食」への変化に対しては、初めは野菜や煮物など苦手なものがでるとなかなか食が進みませんでした。が、「みんなで同じものを食べ

る」ことで、友達の姿が刺激となつてスムーズに食べ慣れていくことが可能となりました。

しかし、「寝る」「寝ない」の違いに対しては、「どうして遊んでいる子がいるのに寝なくてはいいの！」

「寝ないで遊びたい！」

などと、子どもたちが納得できずにイライラ状態となっていました。「同じクラスの友達が遊んでいる中でお昼寝をしたくない」という子どもの気持ちも理解できます。しかし、保育時間の長い子どもたちにとっては、お昼寝（休息）を取らずに過ごすことは、夕方以降の状態にも影響します。保育者にとっては、どのように対応したら良いのか大きな悩みとなり、試行錯誤の日々でした。

幼稚園教諭と共に

保育者自身も「幼稚園」と「保育園」という異なる

環境の中で経験して培ってきたことの違いやとらえ方の違いから、自分なりの保育教育ができないとストレスに感じたり、共にやっていくことの難しさを感じたりもしました。すべてが初めてのことであり、前例がない中で保育教育を進めていくことには戸惑いや悩みも多かったです。互いの経験を生かし合い、力を合わせていかなければ前には進めない状態の中、いつしか互いにかけてえのないパートナーとなることができました。

理解し合えた理由は、「子どもに育てたいもの」が共通していたからだと思います。幼稚園教諭・保育士という違いは問題でなく、保育者それぞれの保育観をお互いに理解することが重要であると、改めて感じることができました。

私にとって、幼稚園教諭と共に保育教育が行えたということは、子ども園に配属になったからこそ経験できたことであり、自分の保育教育の考え方を違

う角度から見直すきつかけとなりました。ほんの些細なことにも双方に意図することがあり、互いの考え方の違いを話していると、幼稚園と保育園の違いを感じました

その一つに「セロハンテープとのりの使い方」というエピソードがあります。

子どもが空き箱を使って自由に製作を楽しんでいる時のことでした。セロハンテープを思う存分に使って次々空き箱やトイレットペーパーの芯を組み合わせて作っていく姿に「ちょっと待って！ セロハンテープ使い過ぎじゃない！」と思った私でした。保育園で勤務していた時も、セロハンテープやガムテープは子どもたちが製作をする中で使っていました。のりで付く素材ならばのりを使うことを知らせたり、使い方や使う量を知らせたりしていくということが先でした。それに対して幼稚園教諭は、「くつつきたい」と思った時にすぐ、くつつける

ことのできるセロハンテープやガムテープをふんだんに使い経験していく中で、その適量を知らせたり、気づかせたりしていくという考えでした。保育園で勤務していた私が、

「無駄のないように……」

「代用できるものは？」

「リサイクルできるものは？」

といつも思っていたことは対照的でした。

このように、教材の与え方一つについても、幼稚園と保育園では違いがありました。

これからの子ども園

子ども園が開園して三年目となりました。初年度のような保育者の戸惑いや子どもたちの戸惑いも今ではなくなりました。子どもたちも「集団生活は子ども園が初めて」であり、いろいろな生活スタイルがあることに疑問を感じるというよりも、ありのまま

まを受け入れているように感じます。保育者自身も一年の流れに見通しがもてるようになってきたように思います。

子ども園は、幼稚園としてのニーズ、保育園としてのニーズおよび子育て支援としての役割をすべて兼ね備えている必要があります。これらのニーズおよび役割に対応していくには、仕事量も忙しさもそして毎日の慌ただしさも、これまで経験した中で最もハードなところだと思います。しかし、新しいものにチャレンジしているということ、道のない所に道を作っているということが楽しみでもあり、次への活力となっているように思います。

子ども園だからこそ、これまでとは違った角度から子どもの育ちについて気づいたり考えたりできていることもあります。そして、何よりも子どもが良いても悪いも率直に反応を返してくれるからこそ励みとなっているのだと思います。

教育の場でもあり、生活の場でもあるということ意識したうえで、子どもが一日を過ごすにはどのような環境がふさわしいのかということを工夫していきながら、子どもたちが心豊かに過ごせる園づくりをしていきたいと思っています。

そして、いつの日か行政も一元化され、幼稚園教諭・保育士という区別なく子ども園保育者となることにより、いつそう働きやすい職場となっていくのではないかと思います。

最後に

これは私自身が四谷子ども園での二年半の中で経験を感じたことであり、私自身もはじめの一步を踏み出したばかりです。これから先、さまざまな地域に広がっていく子ども園に従事される保育者の方々と共に、子ども園の良さを伝えていけるようになりたいと思っています。

(新宿区立四谷子ども園)

「保育者養成」をめぐるメール書簡(2)

— 実習体験の語り合いから生まれる喜び —

上垣内 伸子

佐治 由美子



前回の第一信は、お茶の水女子大学（以下お茶大）

の「保育臨床実習」と十文字学園女子大学の「幼児教育基礎実習」が、共に実習後の話し合いによる振り返りを大切に行っていることを紹介しました。そして、実際に保育の場で子どもと保育を観察し、かかわってみること、振り返って記録し、体験を共有する仲間と話し合うことが、保育者としての振る舞いの前提となる子ども観・保育観を形成するうえで役立つのではないかということを確認しました。

第二信では、担当する教員の揺れや気づきについて

語り合いたいと思います。

上垣内から佐治への第二信

佐治 由美子様

「幼児教育基礎実習」の受け入れをお願いしている実習園の多くは、子どもの自発的な遊びを中心とした保育をしています。実習生は、子どもの内なる思いを感じ取り、寄り添い、応えていくという姿勢を大切に、

一人ひとりとしつくりかかわって一日を過ごします。

この授業を担当し始めた十二年前、一人ひとりに応じる保育実践と、FB（フィードバック）授業の形態や進行、担当教員と学生の関係は、マトリョーシカのよ
うな相似形ではないかと気づきました。全員のレポートを読んで授業に臨む教員側は、事前にその回のねらいと進行を考えています。けれどもいったん話し合いが始まれば、個々の学生の発言によって内容も方向も決まっていくことを尊重し、その中で学生一人ひとりの実践や考え方を受容し、自分らしさを発揮することを出発点とした学びに対して援助的にかかわることに専心します。その姿勢は保育者のそれと同型であり、FB授業は、保育を保育的に学ぶという構造をもっていると考えています。この気づきが、養成校の教員としての「私」を作ったような気がしています。

とはいえ、初めのころは、どうかかわるのが正解なのかと答えを求めるような発言や、このかわりでは

いのか？と承認を求めるような態度に対して、この

実習ではかわりを通して子どもの内面の理解を求めているのにと、その発言を受け止められないこともありました。規則を過剰に守ろう（守らせよう）としたり、公平性を重視したりという、素朴教育学とでもいうような先生のかかわりが認めがたく、私自身が教示的になったり、誘導的な発言をしてしまうこともありました。まるでモグラたたきのように、ねらいから外れる発言を押しえなくなつたのです。そんな状況は今もあまり変わらないのですが、私を焦らせるような発言は、集団全体の理解をむしろ深めるきっかけとなつていくのだと思えるようにはなつてきたと思います。

昨年の一回目の実習後のFB授業で取り上げた記録と話し合いの一部を紹介しましょう。

Aさんのレポート（一部分を抜粋）

「お弁当の時間、T君が何かちよっかいを出したらしく、Kちゃんが「やめてよー」と言った。その時、

私の方を見ながら言っていたような気がした。すると、またT君が何かしたらしく、「やめてよ」と言いながら私の方を見た。それが三・四回続き、私は、Kちゃんは私に気づいてT君に注意をしてほしいと思っているのだらうと思った。しかし、「やめて」と言っているけれど、そんなに嫌がっている様子ではないと思つたのと、一方的にT君に「ダメでしょ」と言つてやめさせるのも良いことなのかわからなかつたので、二人の所に行くことができず、Kちゃんの視線にも気づかないフリをしてしまつた」

Aさんは、その時は二人にどのような声をかければよいのか、T君に何と言つて注意をすれば良いのかわからず行動できなかつたけれど、今思うと、近づいていって、二人の話を聞くことだけでもすれば良かったと後悔していると語り、それを受けて、どのようなかわりの可能性があるか話し合いました。

B「やめてよと言っているのだから差し迫っているわ

けで、だから『何がイヤなのかな?』『どうしたの?』と声をかける。無視しているんじゃないよ、気づいているよという意味」

C「嫌そうじゃなくても、何度も続くからそばに来て話を聞いてほしいのでは? だから、T君に注意するのではないけれどそばには行つてみる」

D「Kちゃんには、この先生ならという期待があると思う。気づかないふりをする、拒否された、無視されたという気持ちが強くなるのでは?」

E「嫌というのではなく、見てほしいのかも」

F「やめてといっているのは事実なので三・四回続いたら行くけど、一・二回目は見るだけ。T君にも言い分があるかも知れない」

G「ちょっとは自分で解決してほしい。自分で解決しなよとそばに行つて言えば?」

実習園が違つても、似たような状況に対して、手探りで懸命にかかわってきたという体験を共通基盤とし

て、自分なりの考えを出し合います。私は、話しやすい雰囲気と流れを作り出すように努めています。以前なら気になっていたGさんの発言ですが、ここでは、うっかりすると予定調和的な発言に終始しそうな雰囲気を断ち切るような作用がありました。自分の意見に仲間の発言が重なっていくことで、自分の考えを明確にしたり、新たな発想を得て自分の実践に対する理解を変えたりしながら、学生自身が語りながら考えを深めていく、ポリフォニックな省察の場となることを目指したいと思っています。

上垣内 伸子

佐治から上垣内への第二信

上垣内伸子様

以前の学会報告^{注2}の中で、授業の担当教員の気づきについてとても興味深く読ませていただいたことを思い出しています。「学生一人ひとりの実践や考え方を受容し、自分らしさを発揮することを出発点とした学び

に対して援助的にかかわろうとする担当者の姿勢は、保育者のそれと同型」ではないか、という気づきでした。私もお茶大の「保育臨床実習」の授業の中で、繰り返し同じような思いを抱いています。そこで、この保育を保育的に学ぶ授業について、少し立ち入って考えてみたいと思います。提示してくださったように、保育的な学びのプロセスで生じた教員側の揺れをどのようににとらえたいのか、その困難さこそ、まさに保育の学びの特徴を表しているように思われます。授業の中で「ねらいから外れる発言を押さえなくなった」と教員の思いをそのまま書き表してくださいました。このことを、保育場面で子どもと保育者の間に起こることに置き換えて考えてみることにしましょう。

保育者は、いつもその日、その時の願いをもって子どもとかかわっています。そこでの保育の自由度が高ければ高いほど、保育者の思うようにならないことが多くなる中で保育は展開していきます。保育者側の思

うようにならない一種の閉塞感は、保育者が疲労感を覚えている時や、精神的なゆとりのない時には、たちまち子どもとの間に危機をもたらしことがあるように思います。このような危機は、いつでも保育の周辺を取り囲んでいます。そんな中で、保育者は子どもと共にその危機の時をもちこたえ、子どもの成長する力に励まされるようにしていつの間にか乗り越えているのだと思います。ここで「いつの間にか」という表現を用いたのは、危機を乗り越える力が子どもと保育者の間に蓄積された相互信頼の力によるものであることを意味しています。保育者が一時的に感じる閉塞感も、実は保育のプロセスにおいて子どもとの間で開かれていくはずのものであり、そのような相互性を生きることが保育の醍醐味であるといってもよいでしょう。ですから保育者は、保育の営みそのものへの信頼に支えられて、子どもと共に育ちゆく存在だと言ってもいいのかもしれない。

授業の中で学生の発する「私を焦らせる発言」も、まさに、保育的な学びのプロセスを私に感じさせました。学生との間で感じられた危機感も、もとをたどれば「学生らしさを発揮することを出発点とした学び」から発していますね。学生がその人らしく言い表した発言は、どのような内容であれ、受け止められなければその場の学びとしては成立していかないでしょう。受け止めにくい発言でも「集団全体の理解をむしろ深めるきっかけとなっていくのだ」という気づきは、ここでの学びをとらえるうえで、この危機をくぐり抜けてマイナスからプラスへと方向転換が起こっているように感じられます。このような教員の姿勢こそ、学生一人ひとりの存在に向き合う対等感を土台として学生と共に成長していこうとする、まさに保育的な学びを形づくっていく大きな力になっていくのではないかと、私も気づきを与えていただいたように思います。受け止めにくい発言も、話し合いの雰囲気壊さな

いような発言に終始してしまいやすいところを打開してくる作用があったのですね。どのような発言であれいろいろな意見の重なり合いを通して、学生それぞれが自分を作りかえながら考えを深めていく授業は、かけがえない相手がいるからこそ、その相手に添って自分を変化させようとする保育的行為と、まさにマトリョーシカのような相似形であるように思います。

教員が支えつつ促す中で、学生同士が相互的に省察を深めるプロセスにポリフォニー性があることを、私は昨年度の学会報告で触れて以来考え続けていますが、この概念は視点の置き方によって異なる意味もちうるように思い、ポリフォニーという言葉にくくれる学びの相互性についても一度ていねいに考える必要を感じているところです。

ポリフォニーを語る際の他者性の問題を保育の側から考察しつつ、保育を保育的に学ぶことが保育者養成においてどのような意味をもつのか、今後明らかにし

ていければと思います。

佐治 由美子

二回にわたって「保育者養成」をめぐるメール書簡を掲載させていただきました。ここでの語りは、これからも続くであろうやりとりの、ほんの始めの部分にすぎないものです。ここで扱っているテーマは、私たちそれぞれの所属大学に限られたことではなく、省察に重きをおく授業であればどの養成校の方々とも共有していくことのできるものではないかと考えています。今後共に考えていく場をもつことができれば、と願っている次第です。

上垣内伸子 (十文字学園女子大学教授)

佐治由美子 (お茶の水女子大学専任講師)

注

- 1 多声性。独立した複数の声絡み合いつつ進行する様態。
- 2 実習指導に関する詳細な報告が、保育学会「第五十一回大会」から「第五十六回大会」においてなされている。

編集後記

岸井先生の『保育の中の物語』のU男は、一人園庭で苦勞してとったミカンを取らしげにはかの人に見せたり、分けたりした後、今度は一緒に収穫に行く。「一人」が充分に受け止められて「みんな」や「一緒に」が生まれる、と岸井先生は明快に語る。一方、特集の『祭り』ではこの「一人」と「みんな」の関係が逆転してしまう。集まったら楽しい、何かが起こる、そこから始まるよ、というアイデアもまた、古来の人間が培ってきた智恵なのだ。歌を歌い踊り、食を食み、笑い合っ、一人ひとりの自分を更新していく。

年末に、本誌の連載をもとにまとめた『新しく生きる—津守真と保育を語る—』が出版予定である。お楽しみに。(H)

幼児の教育 第108巻 第10号

平成21年10月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 金子めぐみ
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ
扉カット ヨシエ
扉題字 津守 真
カット 田崎トシ子
編集委員 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉子どもと風

黒須和清・みよしのりえ・桐ヶ谷まり・新開一司

・観察のまど・子どものにわ(6) 砂上史子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

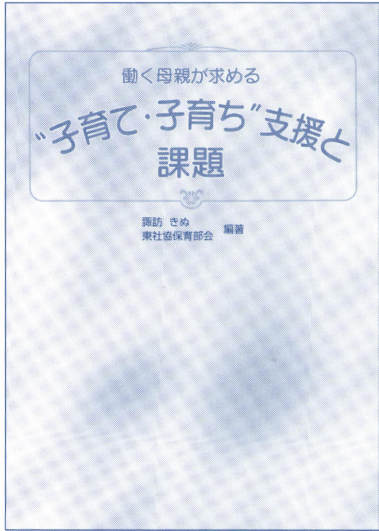


ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開開始まりました！
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。
ご意見ご感想などは、youjimap@yahoococ.jpまでお寄せ下さい。

子どもも親も笑顔がこぼれる社会へ

働く母親が、保育園を理解するために… 保育園が、働く母親を理解するために…
望ましい“子育て・子育て”支援とは？



10742

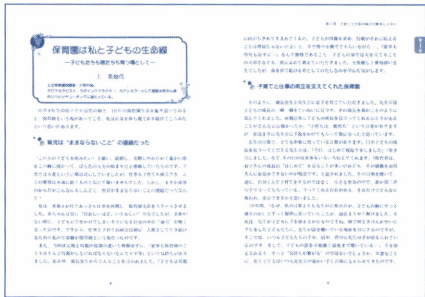
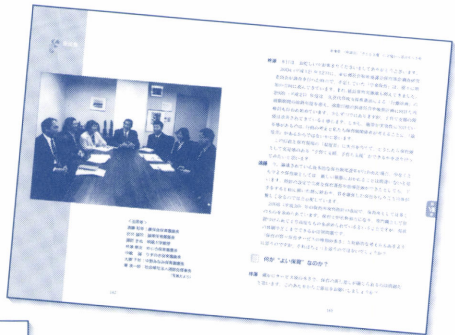
働किながら子どもを育てている
母親へのエール！
働く母親を支える保育者や
社会全体への篤いメッセージ！

働く母親が求める “子育て・子育て”支援と課題

諏訪きぬ・東社協保育部会／編著

保育園での“子育て・子育て”支援は、“働く母親の生命線”。親子を支える保育園は、予算削減に悲鳴をあげながらも日々全力投球しています。本書は、親と保育園が協働し、笑顔こぼれる時間や空間を創り出すための提案です。

21×15cm 200ページ 定価1,575円(税込)



CONTENTS

- はじめに
- 第I章 子育てと仕事の両立は簡単じゃない
- 第II章 園が親を支えるということ
- 第III章 働く母親が子育てについて思っていること
- 第IV章 働く母親が保育園に望んでいること
- 第V章 働く母親が望む子育て支援
- 第VI章 少子化対策・子育て支援策と保育園
- 第VII章 〈検証〉保育園が子育て支援の場としてあり続けるために
- 第VIII章 〈座談会〉“子ども支援”の立場から発言すべき時
- 第IX章 親と子どもを支える子育て支援
- おわりに

キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

保育の計画・記録・評価でお困りの先生、計画作成でスキルアップを目指す先生におすすめの1冊です!

すぐに役立つ! 保育の計画・記録・評価

計画作成 -CD-ROMソフト付-

監修/網野武博 編著者/寺田清美・田中浩二

新保育所保育指針に基づいた、保育課程編成、指導計画の作成、各種計画・記録など順を追って解説し、体系的な理解を促し、CD-ROMソフトを使ってさまざまな計画が作成できます。



●簡易ソフト

「パソコンで作る保育の計画と記録」



10911

新人からベテランまで

21×25.7cm 120ページ 定価3,990円(税込)

保育課程編成

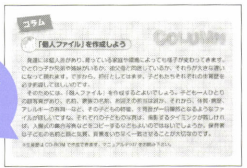
やさしくサポートします。

読みやすい解説文で理解もスムーズに!

本書の特徴

- ① 保育所保育指針規定のポイントをズバリ解説!
- ② 日々の保育と結びつくわかりやすい解説文!
- ③ 簡易ソフトと解説で計画作成がさらにスムーズに!!

難しいところはコラムでわかりやすく!



キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五四四円)☆